

〈贈る言葉〉

Juliet W. Carpenter 先生に感謝

風 間 末起子

Juliet W. Carpenter 先生は、私たちにとって、特別な先生である。すべての先生はみな特別だが、カーペンター先生は特に特別な先生であった。

その理由は、世界的に著名な翻訳家であるから、翻訳という専門分野を本学に浸透させた希有な教授であるから、バイリンガルを真に実現なされたアメリカ人であるから、『源氏物語』や『雪国』の翻訳家サイデンステッカー (Edward G. Seidensticker, 1921-2007) の秀逸な愛弟子であったから等、理由は数え切れない。だが、先生の素晴らしさは、業績と功績を挙げていくだけでは物足りない。先生の鷹揚なお人柄や、さりげなく大切なことを伝える言葉の達人として、そば近くで先生を知っているすべての者にとって、カーペンター先生はいつも特別な存在であった。

カーペンター先生の足跡を追うことで、私たちが知りたい何かが見えてくるかもしれない。1964年の夏、高校生の時 (16歳) に日本語の勉強を始めた頃から、先生は、サイデンステッカーのような、日本文学の翻訳家になれたら、という願いを抱き始めたそうだ (*Wondering Aloud: Reflections on Language, Literature and Culture*, 同志社女子大学英語英文学会50周年記念、2017: 5)。

ミシガン大学大学院で日本語・日本文化を専攻なさって以来、先生はこれまで70冊以上の翻訳著を出版なさってきたが、おそらく、「翻訳家ジュリエット・カーペンター」が私たちの前に鮮烈な光を投げかけたのは、1990年、俵万智の短歌集『サラダ記念日』(第32回角川短歌賞受賞作) の英語翻訳 *Salad Anniversary* (講談社インターナショナル、1990. 3) の出版に始まるかもしれない。俵万智の作品は、私たちに短歌をぐっと身近なものにして

くれたし、日常性を短歌にして謳う楽しさを大いに共感させてくれた。それに相まって、短歌の英語翻訳、それ自体が日本人を誇らしい気分させてくれた。この作品との出会いはカーペンター先生にとってはどんなものだったのだろうか。

その後、長い翻訳家としての歩みの中でも、特にここ5年間、先生は翻訳賞給なめと言いたいほど多くの賞を受賞されて、その功績を讃えられている。2014年10月には、司馬遼太郎の大著『坂の上の雲』の翻訳著 *Clouds above the Hill* に対して、第50回日本翻訳出版文化賞（NPO 法人日本翻訳家協会）を受賞された。翌年には水村美苗の長編小説『本格小説』の翻訳著 *A True Novel* に対しては、Next Generation Indie Book Awards（小説部門グランプリ）、日米友好基金日本文学翻訳賞、さらに Lewis Galantière Award（American Translators Association 主催）を立て続けに受賞されている。こうした華々しい受賞歴とご活躍の軌跡に目の眩む思いと、同僚としての誇らしさをも、私たちは存分に感じさせていただいてきた。

このような受賞歴が数ある先生だが、ご自身にとって、最も思い出深いのは、安部公房の小説『密会』だという。なにしろ最初に翻訳した本が、日米友好基金日本文学翻訳賞と Columbia University Translation Award を受賞したのである。これは先生にとって大きな励みとなったという。

現在も先生の翻訳著は続々と出版されている。司馬遼太郎の『竜馬がゆく』の翻訳著 *Ryōma!* は近刊であるし、中野孝次著の『いまを生きる知恵』の翻訳著 *Words to Live by* は2018年に出版された。この本は良寛、兼好、鴨長明、道元、西行等の言葉を収集したものである。先生は大学時代に日本語の言語研究を深めるために『方丈記』、『徒然草』、『平家物語』を授業で学んでいたが、このような古典との出会いがきっかけで、日本文学に開眼したそう。50年前、大学生の頃に読んでいた作品を自身で翻訳することの感動について、先生は率直に語られている（*Wondering Aloud*, 9）。2017年6月には三浦しをんのベストセラー小説『舟を編む』の翻訳著 *The Great*

Passage を刊行され、2017年5月31日に本学の栄光館で三浦しをん氏を迎えて、対談も行われた。同年5月には水村美苗著の『母の遺産～新聞小説』の翻訳著 *Inheritance from Mother* が刊行された。同女では2013年10月9日に、翻訳者カーペンター先生とのご縁で、水村美苗氏をお迎えしての講演も実現した。2017年には磯田道史著の歴史小説『無私の日本人』の翻訳著 *Unsung Heroes of Old Japan* が刊行されている。この本は、江戸時代の人たちが実践した「無私」という哲学を描いた歴史小説である。映像作家である出光真子のフェミニスト小説『ホワイトエレファント』の翻訳著 *White Elephant* は2016年に出版されている。

これほど輝かしい経歴をもったカーペンター先生は、いったいどのようにして今にいたったのか。この問いは実に興味深く、これを解くだけでかなりの分量のエッセイが書けるかもしれない。

先生の膨大な業績書を拝見しながら、先生が日頃おっしゃっている真意を見つけたような気がした。人生に雑用という言葉はない、という真意を。

現在のカーペンター先生は、小説の翻訳家、錚錚たる著名な日本人作家の翻訳家というイメージが非常に強い。上に挙げた作家のほか、樋口一葉、夏目漱石、芥川龍之介、円地文子、渡部淳一、乃南アサ、梶井基次郎、辻原登、小池真理子、宮部みゆき、五木寛之、平野啓一郎等、挙げていたら切りがない。だが、その一方で、先生は40年以上にわたって、日本文化について、多くの翻訳を手がけられている。特に仏教（親鸞）、日本現代美術、陶芸、俳句、短歌、現代詩、華道、茶道、着物、懐石料理、古民家、日本のアートクラフト、日本映画、日本の考古学、についての翻訳著を多数刊行されている。この事実を知って、先生の日本文学の翻訳の源流はここにあったのかと、深く敬服の念に打たれる。手がけられてきた分野の範囲と多様さには驚くばかりである。『日本仏教美術の源流 彫刻・考古篇』奈良国立博物館同朋舎、1978) を初めとし、*The Art of Rosanjin* (講談社インターナショナル、1987) も特筆したい。

その他、日本の社会問題（教育、中流意識、漫画文化、女性のライフスタイル）にもアンテナをはり、『ジーニアス和英辞典 第3版』（大修館、2008）や日本の英語教育についての記事・講演と、その範囲は果てしもなく広い。おそらくカーペンター先生は、こうした幅広い分野での翻訳を、日本文学を翻訳するための道筋とは考えずに、ひたすら、依頼のあった分野の翻訳に専心なされてきたのであろう。そのひたむきな姿勢が、今日のカーペンター先生のすべてを作り上げていったのだと改めて感動し、敬服の念に打たれる。

最後に、本学における先生の足跡をたどってみたい。先生はいつもこうおっしゃっていた。「同女で教えることによって、ここまで私はやってこれたと思います」と。先生は翻訳家であると同時に教室で学生たちを33年間教えてこられた。そのご功勞に心から感謝の気持ちをお伝えしたい。

カーペンター先生が同志社女子大学に着任されたのは1986年4月まで遡る。同女の短期大学部英米語科に専任講師として着任された。それから3年後の1989年4月に同志社女子大学助教授、6年後の1995年4月には教授に、2年後の1997年4月には大学院文学研究科日本語日本文化専攻修士課程教授、その後2007年4月には大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期）教授、2011年4月には博士課程（後期）教授へと昇任された。2014年4月からは同志社女子大学および大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程（前期・後期）の特別任用教授として、続く5年間、本学・本学科で教鞭をとられた。また、先生は着任なさってから9年後の1995年4月から、アメリカのバージニア州ウィリアムズバーグ市において、1年間の在外研究で研鑽を積まれている。

校務についても、宗教主任（1990. 4～1992. 3）、学生主任（1998. 1～2000. 9）、そして英語英文学科主任（2008. 4～2010. 3）を歴任された。2012年からは英語英文学会会長を6年間（～2018. 3）にわたって務められた。先生が学科主任をなさった時期は、学科が学芸学部から表象文化学部へ学部名称を変更し、学科が京田辺キャンパスから今出川キャンパスに移転した記

念すべき変革の期間であった。このように、先生は、大学人として、学生の育成、専門分野における業績、大学運営への貢献、こうした3つの方面で、たゆまず尽力・専心なさって、同僚たちを牽引してこられた。心から感謝を申し上げたい。

最後になるが、先生にお祝いを申し上げたい。2019年（平成31年）4月2日に先生は本学から名誉教授の称号を授与された。この祝賀と共に、先生はこの2019年3月末日をもって同女から引退される。あまりにも特別な存在であったから、その寂しさは表現しようもないが、私たちは、先生の明るい笑顔に勇気づけられて、その別れを出発として考えていきたい。そうした肯定的な姿勢こそ、先生が私たちに教えてくださった大切な生き方であったような気がする。本当に有り難うございました。